# ＦＤ活動報告書

## （平成３０年度）

鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻
［教職大学院］

# ＦＤ活動報告書（平成３０年度）

１．ＦＤ研修会

２．ＦＤ会議

３．ＦＤアンケート

４．ＦＤ座談会

５．授業リフレクション

６．教育相談Ｄａｙ

## １．ＦＤ研修会

本年度は、ＦＤ研修会の回数を昨年度よりも増やし、年間２回の開催とした。詳細は以下のとおりである。

| No. | 名称 | 実施日 | 内容 |
|---|---|---|---|
| 1 | 第１回ＦＤ研修会 | 11 月 27 日 | ・講演：地域に根ざした教職大学院の改革について<br>講師：北海道教育大学　佐々祐之教授 |
| 2 | 第２回ＦＤ研修会 | 3 月 2 日 | ・講演：学び続ける教員であるために：これからの教職大学院の役割<br>講師　独立行政法人教職員支援機構つくば中央研修センター　葛上秀文センター長 |

## ２．ＦＤ会議

ＦＤ会議とは、教職大学院の①ＦＤ活動のあり方の検討、および②ＦＤの具体的活動を行うための場である。学期中はほぼ毎週開催（30 分間～１時間）しており、出張等がない限り教職大学院の専任教員は全員参加している。内容としては、個々の学生の学習状況の確認・協議、授業リフレクションの発表・協議、アンケート結果の共有と改善策の検討、教育相談Ｄａｙ・研修会等の諸行事の検討とふりかえり等であり、本教職大学院のＦＤ活動を日常的に支える機能を果たしている。

各回で扱った内容は次のとおりである。

| 回 | 実施日 | 討議事項 |
|---|---|---|
| 1 | 4 月 2 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり |
| 2 | 4 月 5 日 | 学生の学習状況 |
| 3 | 4 月 12 日 | 学生の学習状況 |
| 4 | 4 月 19 日 | 学生の学習状況 |
| 5 | 4 月 26 日 | 学生の学習状況 |
| 6 | 5 月 10 日 | 学生の学習状況 |
| 7 | 5 月 17 日 | 高度化実践実習Ｉのふりかえり |
| 8 | 5 月 24 日 | 教育相談Ｄａｙの改善について<br>開発実践実習Ｉのふりかえり |
| 9 | 5 月 31 日 | デジタルポートフォリオの活用<br>教職課題研究Ⅱのふりかえり |
| 10 | 6 月 7 日 | ＦＤアンケートの改善 |
| 11 | 6 月 14 日 | 高度化実践実習Ｉのふりかえり<br>教職課題研究Ⅱのふりかえり |
| 12 | 6 月 21 日 | 学生の学習状況 |
| 13 | 6 月 28 日 | 学生の学習状況 |
| 14 | 7 月 5 日 | 学生の学習状況 |
| 15 | 7 月 12 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり |
| 16 | 7 月 19 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり |
| 17 | 8 月 30 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり |
| 18 | 9 月 6 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり<br>学生の学習状況 |
| 19 | 9 月 27 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり |
| 20 | 10 月 18 日 | 開発実践実習Ⅱのふりかえり<br>学生の学習状況 |
| 21 | 11 月 1 日 | デジタルポートフォリオの改善 |
| 22 | 11 月 15 日 | 学生の学習状況 |
| 23 | 11 月 22 日 | オフィスアワーの改善 |
| 24 | 12 月 6 日 | 学生の学習状況 |
| 25 | 12 月 13 日 | 学生の学習状況 |
| 26 | 12 月 27 日 | 時間割の改善 |

| | | |
|---|---|---|
| 27 | 1月 10 日 | ＦＤアンケートの結果のふりかえり<br>学生の学習状況 |
| 28 | 1月 24 日 | 学生の学習状況 |
| 29 | 2月 7 日 | ＦＤ座談会の企画<br>授業リフレクション |
| 30 | 2月 14 日 | 授業リフレクション |
| 31 | 2月 28 日 | 授業リフレクション |
| 32 | 3月 14 日 | 授業リフレクション |
| 33 | 3月 28 日 | 授業リフレクション |

## ３．ＦＤアンケート

本年度も各ターム終了時にＦＤアンケートを実施した。実施期間については、下表のとおりである。各質問項目についての集計結果は、次ページに示した。

| 実施ターム | 実施期間 |
|---|---|
| 第１ターム | ６月１４日　～　６月２２日 |
| 第２ターム | ８月　１日　～　８月１６日 |
| 第３ターム | １２月　３日　～１２月１１日 |
| 第４ターム | ２月１２日　～　２月２０日 |

# ＦＤアンケート：平成 30 年度の結果

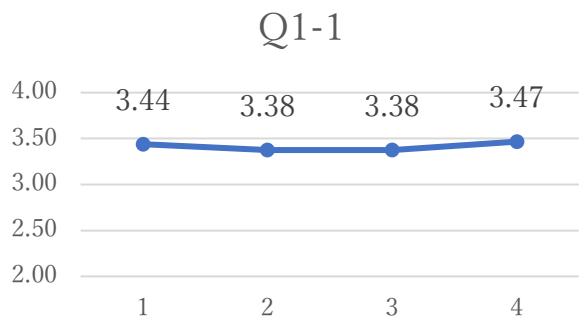
〇アンケートの方法　　無記名式
〇回答の集計方法　　次のように得点化してタームごと（Ｔ１～Ｔ４）に平均点を算出
　　４点：とてもよく当てはまる
　　３点：どちらかというと当てはまる
　　２点：どちらかというと当てはまらない
　　１点：まったく当てはまらない

- - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - - -

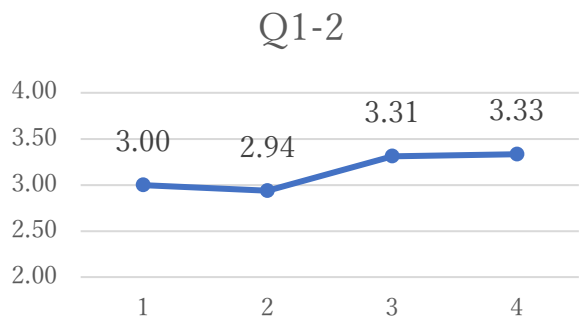
## ■　１年生の結果（回答者数：第１ターム 16 名、第２ターム 16 名、第３ターム 16 名、第４ターム 15 名）

【Ⅰ. 授業と実習の全体について質問します。】

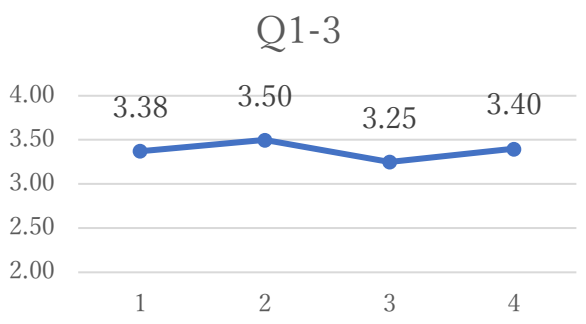
１）授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？



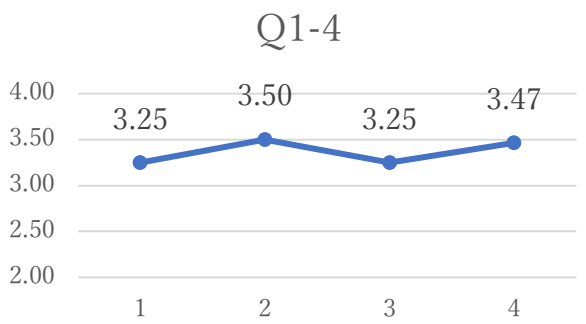

２）授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか？



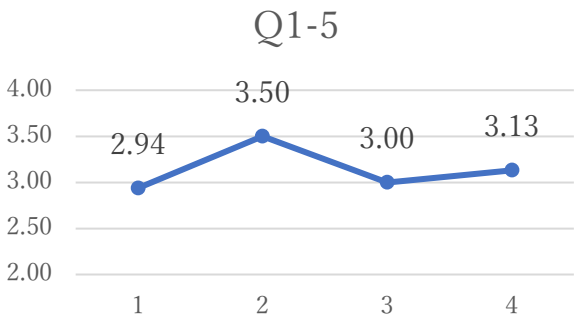

３）教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新人教員の養成ならびにスクールリーダー（中核的中堅教員）養成を果たすのにふさわしい内容でしたか？




４）教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その解決に向けた内容になっていましたか？



5）履修指導は適切でしたか？




6）施設と設備は利用しやすかったですか？

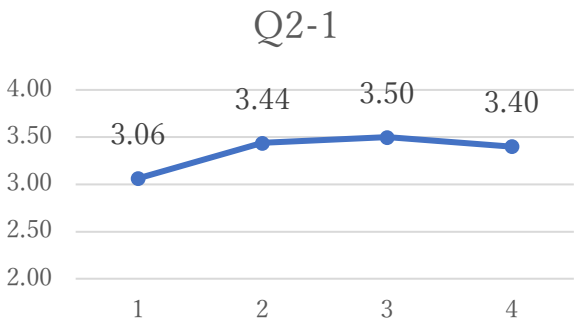
［自由記述のため割愛］

7）現職と学部新卒が一緒に学べるように授業が組まれていますが、いかがですか？

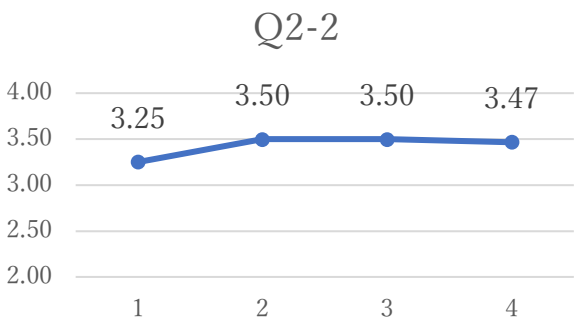
［自由記述のため割愛］

【 II. 必修科目について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？




2）教員の指導体制は適切でしたか？

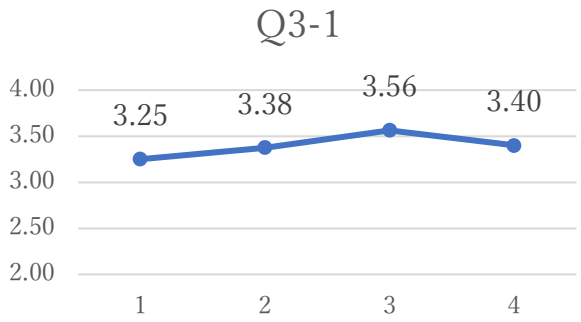



3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

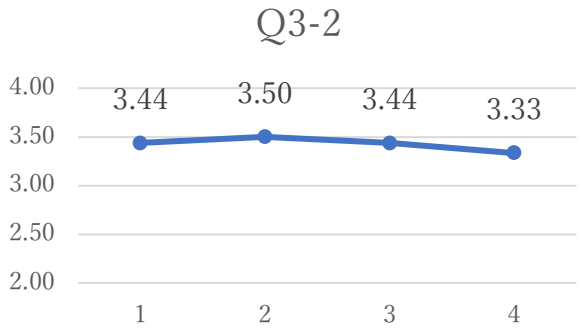
［自由記述のため割愛］

【 III. 選択科目について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？




2）教員の指導体制は適切でしたか？

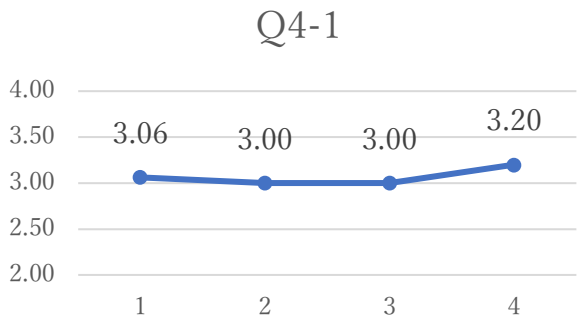



3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

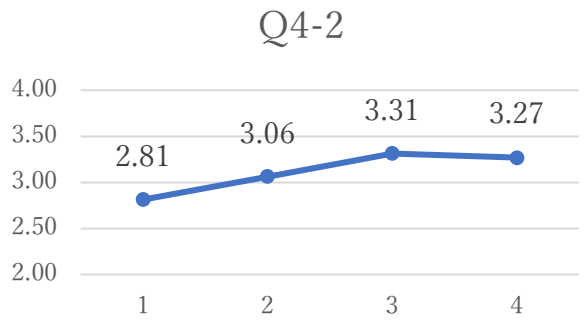
［自由記述のため割愛］

【 IV. 「教職課題研究 I」について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？



2）教員の指導体制は適切でしたか？




3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

［自由記述のため割愛］

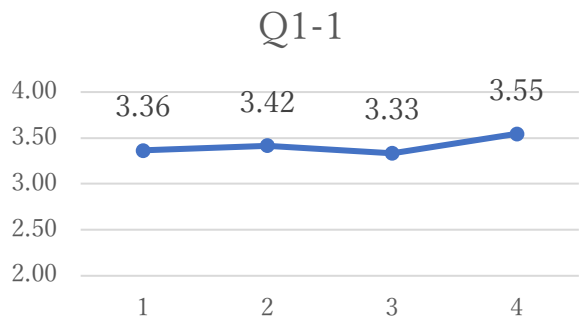
【 V. 授業以外および実習以外での教員の対応について要望はありますか？】

［自由記述のため割愛］

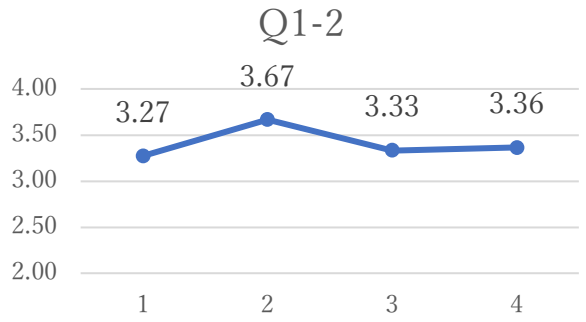
## ■ ２年生の結果（回答者数：第 1 ターム 11 名、第 2 ターム 12 名、第 3 ターム 12 名、第 4 ターム 11 名）

【 I. 実習について質問します。】

1）実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？




2）実習の指導体制は適切でしたか？




3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

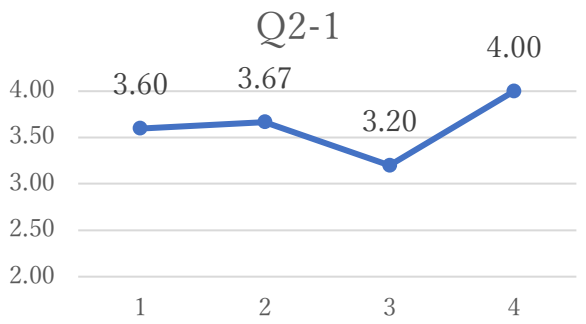
［自由記述のため割愛］

【 II. 授業について質問します。】

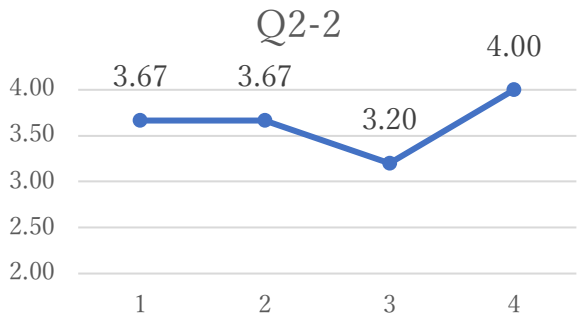
※「教職課題研究 II」以外

T1: N=10&9、T3: N=5、T4: N=1

1）授業はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか？




2）授業の指導体制は適切でしたか？

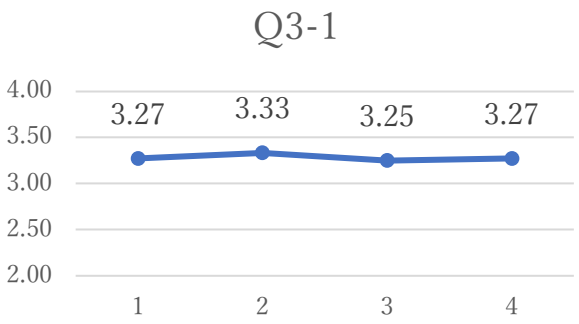



3）満足している点と改善してほしい点はありますか？

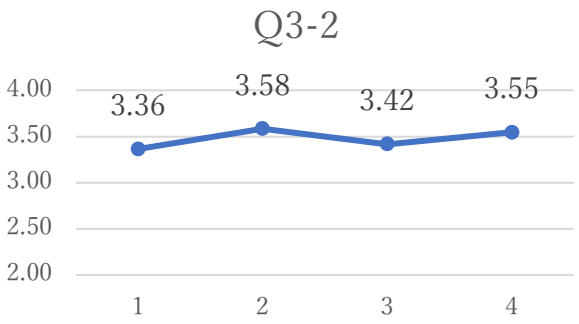
［自由記述のため割愛］

【 Ⅲ.「教職課題研究Ⅱ」について質問します。】

1）授業の内容はあなたのニーズに沿ったものでしたか？




2）教員の指導体制は適切でしたか？




3）この授業では訪問授業や大学での授業を行っていますが、満足している点と改善してほしい点はありますか？　［自由記述のため割愛］

4）その他で、満足している点と改善してほしい点はありますか？　［自由記述のため割愛］

【 Ⅳ. 実習以外および授業以外での教員の対応について】

1）実習以外および授業以外での教員の対応について要望はありますか？

［自由記述のため割愛］

以上

## ４．ＦＤ座談会

（１）期日
平成３１年２月２１日（木）１６：１０～１７：４０

（２）会場
管理・理系棟１階　ＰＬＣルーム

（３）プログラム
①開会の言葉
②アンケート結果の説明
③アンケート結果の対応策
④意見交換
・授業について
・実習について
・学生生活・環境設備について
⑤総括

（４）意見交換の概要
①授業について
・学部の頃と比較して、文献を読んで深めたり省察したりがあり、それが習慣になりつつある。それを教員になっても活かしたい。
・講義が終わった後によく分かることもある。他の院生と語ることで深まることもある。
・教科を深めたいと思って進学してきた面はある。しかし、それ以外の面での学びがあり、つながりが見えてきた。指導体制が３人というのは徐々に分かってきたが、それまでは見通しがつかず戸惑いもあった。
・質問が苦手なので、ミニレポートで伝えられたら…。→［教員から］率直な意見を寄せて欲しい。まとめのシート（ミニッツペーパー）や manaba（鹿児島大学の Learning Management System）に書いて欲しい。教師の一意見としては、自分から質問できる力もつけてほしい。
・個々の学習状況について、各教員はどのように理解しているのか？　→［教員から］毎回成果物を作る授業では把握しやすい。授業の最中の把握については、対話の内容から把握したりするが、まだ工夫の余地があるだろう。ＩＣＴや少人数教育の特性を活かしたり、課題にした文献をどのくらい理解しているかを尋ねる機会を増やしたり等を試みたい。
②実習について
・入学前のニーズと入学後のものが一致していたのでよかった。その軸で実習を見ることができた。
・遠方での実習の際、行き帰りの中での院生同士の語りが有意義だった。
・高度化実践実習Ｉ担当の附属学校の先生に負担をかけたのかなと悩むところはあった。
・高度化実践実習Ｉは、最初、目的ややるべきことが分からず、７月になってやっと見えてきた。附属の先生との連絡も…。教員採用試験準備の時期とも重なり、検証授業の準備が大変だった。理論もわからぬまま、とにかく授業をやらざるをえなかった。連絡調整がうまくいかなくて不安や自信を失ったりすることもあり、こなすという感じになってしまった面もある。でも、今思え

ば、行ったことに意義があったし、自分の軸があることが大切だとわかった。→ ［教員から］来年度は、共同研究の形をとるなどして附属小教員との関わりを充実させたい。他方、附属教員の勤務時間の問題もある。また、この時点では軸を必ずもつ必要はないのでは…。教員側としても、軸がなくても意味が出てくる実習になるよう工夫したい。探究課題を立てて少しずつ俯瞰的に見えてくるという当実習の性格と、検証授業という呼び方のギャップについても再考したい。

・重点領域実践実習Ｉでは、実習先の設備環境が分からず、何を持っていけばよいのか分からなかった。獅子島ではプリンタが用意されることが分かっていたのでよかった。

③学生生活・環境設備について

・ＦＤアンケートの説明が初めにあったらよかった。→ ［教員から］年度当初に説明をしたが、もっと印象に残るような説明の仕方になるようにして、趣旨が充分に伝わるようにしたい。

・ＦＤアンケートは、もっとかみ砕いた質問項目にしてもらいたい（例：ミドルリーダーの項目）。ただ、学んでいくうちにだんだんとわかってきた。→ ［教員から］確かにやや難しい表現もあるが、経年変化も把握する必要があるので文言はそのままにさせてもらう。その時々で補足説明することにしたい。

・ＦＤ座談会は、Ｍ２も参加できる時間帯にしてはどうか。→ ［教員から］より早い時期からの周知と時間帯の工夫をしたい。

・院生室があることがありがたい。

・院生室は、本を置く場所がもっと広いほうがよい。院生室は３室あるが、Ｍ１とＭ２を混ざるように配置してもよいのでは。

## ５．授業リフレクション

教員間の授業リフレクションに用いた「授業リフレクションシート」（各科目）を、次ページ以降に示した。

| 講義名 | 学校を基盤とするカリキュラム開発（必修） | 2018 年度【Ｔ２】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 廣瀬・奥山・久徳・古園 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | カリキュラム開発等の諸理論や、その意義、要点を理解できる | ・生産物（理論に基づいた事例分析結果） |
| 現 | 事例を整理し、その多様性や特徴を理解・分析できる | |
| 新 | 教育課程の具体的な要点や手続きを理解し、その開発力量を高める | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| カリキュラムに関する諸概念の理解を活動と講義形式で、カリキュラム開発に関する研究知見（カリキュラム・リーダーシップ）の獲得を文献読解で行った。その後、理論を視点に事例（自校や他校）を分析し、その特徴を確認した【最終課題】。その結果を冊子としてまとめた。 | ・カリキュラムの概念や理論について理解するために、文献読解や発表を行う必要がある。<br>・理論に基づいて学校を分析する学習は、新鮮だったようだ。 | ・活動場所を多様に認めることで、相談したい人、静に活動したい人といったニーズに応えた。<br>・理論と事例を往還させるために、事例分析とテキスト再読の時間を講義内にて確保し、質疑応答に個別に応じた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| カリキュラム開発やマネジメントの概念について調べたことを整理する活動をジグソー学習形式で行ったが、議論によって両者の異同を整理することが、ある程度できていた。次年度は、もう少し議論の時間をとりたい。理論を枠組みに勤務校等の事例を分析する学習活動を通して、理論と事例（実践）の往還を進めることをねらったが、講義中の様子や提出された最終課題を見るに、丁寧にそれらに取り組んでいたと思う。新卒学生の中に、事例分析を行う際、学校関係者にインタビューを主体的に行う学生がいた。次年度以降では、こうした学びのケースを取り上げていきたい。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 前年度に引き続きデザインシートを作成したが、打合せの時間をとりなどして、TT の組み方や動き方について確認したり、互いの専門性を発揮できるような活動内容を計画したりしていきたい。 |
| シラバスレベル | 特になし。ただし、みなし教員に講義を担っていただいたが、呼べる時期によって、授業内容を前後に入れ替えるといった修正が、その都度、必要になる。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（特になし　　） |
| 主なテキスト | 木原俊行他(2012)『学校を基盤とするカリキュラム開発を推進するリーダーのためのハンドブック-その理論と実践を学ぶ-』 |
| 前年度からの改善点 | 昨年度の初代院生の生産物をモデルとして提示できた。ゴールイメージが湧き、課題を解決できるという見通しを持てたようである。「昨年度の分析にとらわれ過ぎない程度に、参考にしましょう」という声掛けは、次年度も忘れずにしていきたい。 |

| 講義名 | 特色ある教育課程とそのデザイン（必修） | 2018 年度第【Ｔ４】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 廣瀬、山本、奥山、久保、上仮屋、川田 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 特色あるカリキュラムの意義、要点、そのデザイン方法を理解できる | 生産物（各自が設定した探究課題に基づき、指導案の修正や、トピックに関する全体構想等を行った） |
| 現 | カリキュラム（単元レベル）を事例や理論を活用してデザイン・修正できる | |
| 新 | カリキュラム（複数学年・教科横断的）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 特色ある教育課程について、理論や事例の収集及びデザインを行う。複式、特別支援、ICT 等、いくつかのトピックに分けて、多様なニーズや社会的･地域的背景及び特色を踏まえた授業やカリキュラムのデザインや修正に取り組みつつ、教育課程の全体像を構築・批評する力量を培う。 | ・扱ったトピックについて、自己の関心や探究課題との関係性を確認しつつ最終課題に取り組めていた。<br>・年度最後の時期でもあり、学習の進め方（まとめ方）に関する相談は減った。 | ・今年度も附属小や附属特別支援学校にて座談会やパネルディスカッションを行い、の理解深化を図った。<br>・１年間の学びをカリキュラムの視点から総括する学習活動を行った。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・） |
|---|
| 今年度も、みなし教員によるパネルディスカッションを開くなど、多くの支援を頂いた。研究者教員では難しい内容であったため、とても助かった。トピック学習であり、各トピック間の繋がりがさらに必要かと、昨年度、考えていた。しかし、院生と交流した際に、各トピックで学習が完結したことで、学びにテンポがついたとの声が寄せられた。こちらが各トピックを意図的につなげ過ぎない方がよいという視点がなかったため、興味深い意見であった。どちらをとるか悩ましいところであるが、院生の関心や探究課題との関連性をより意識させる方向で、次年度は導入をさらに工夫したい。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 各トピックと、院生の関心や探究課題との間には、関連性の強弱がある。その点を学習者にも意識させる導入を心がけ、座談会やパネルディスカッションでの議論深化に繋げる工夫が必要だと感じた。トピックごとの時間配分も、要検討である。 |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>【変更内容　　】<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>【変更内容　　】<br>③その他（特になし　　） |
| 主なテキスト | 各トピックに関連して資料を提示した。 |
| 前年度からの改善点 | 大きな変更点もなく、改善も施せなかった。この点が次年度の課題である。担当者と検討を進めたい。 |

| 講義名 | 授業研究の実践と課題（必修） | 2018 年度【Ｔ３】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 溝口・假屋園・原田・山本・下古立・山元・山内・久保 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 教科の特性や学級形態、児童・生徒の実態に即した授業の観察・分析を的確に行うとともに、授業検討会の趣旨や進行方法を理解して、討議の中心課題をふまえた授業改善のための議論を行うことができる。 | 模擬授業、授業検討会の成果、及びこれらの企画・運営への参画状況 |
| 現 | 授業の観察・分析を緻密に行うとともに、授業検討会における議論を的確に整理し、討議を円滑に進めるファシリテーターとしての役割を果たすことができる。 | |
| 新 | 変更なし | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 授業研究会の参加・運営経験から授業研究の課題を抽出し、その克服に向けて「初任者研修を兼ねた学校の研究テーマに関する授業研究」を組織した。授業観察・分析の方法や授業研究会の組織の仕方について協働で探究することをねらいとした。 | ・授業の観察・分析において視点生を決め具に観察することの意義を確認できた<br>・高度化Ｉの実習が始まり、学生に余裕がなくなったこともあり、協働への温度差（不満も）が生じた。 | ・現職教員が、授業研究におけるメンターとしての経験や指導助言者としての経験をもてるよう、授業の準備段階・検討会の段階での役割分担を行なった。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・）**

昨年同様、「授業研究の企画・実施・省察」のサイクルを意識した授業計画とした。昨年度は高度化Ｉの時期と重なり、学生一人一人の負担が大きかったため、今年度は第３ターム移行して実施した。また毎回の進め方も、学生が 180 分すべてを企画・運営する方式から、90 分の企画・運営に改め、残りの 90 分は前半の省察をラウンドテーブルで行う方式に変えた。学生数も増えたため、班数も増加し、班ごとの発表会数も削減できた。企画・運営では。作業負担の個人差が出るため、評価対象となる成果物は別途、毎回の課題と最終課題を出すことで対応した。学生アンケートからは、「ハードであったが学びも大きかった」といった感想も得られた。課題としては、みなし専任教員も含めた担当教員の役割分担について充分な調整ができておらず、その日ごとの調整となっている点が挙げられる。

| 改善計画（案） | |
|---|---|
| 実践レベル | ・院生数は減るが、３班の編成は維持し、各班３週に１度の担当とする。<br>・授業研究を行う場の設定を明確化する（外部講師を呼ぶ／呼ばない研修等） |
| シラバスレベル | 特になし。みなし教員（附属小・中学校）には１回の講義に参加して頂いたが、可能であれば複数回の招聘も考えたい。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（特になし　　） |

| 講義名 | 教材研究、指導方法、評価に関する<br>実践的課題とその改善（必修） | 2018 年度【T1-2】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 溝口・假屋園・原田・山本・下古立・山元・上仮屋・佐藤 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 教材研究、指導方法、評価の側面から、教科の授業設計に関する自己課題を明確化できる。/ 多様な児童生徒に有効な教材の開発、指導や評価の方法について説明することができる。 | 授業、授業検討会の成果、及びこれらの企画・運営への参画状況 |
| 現 | 教科の授業設計に関する自己課題を明確化するとともに、課題解決に向けた見通しを立てることができる。/ 教材の開発、指導や評価の方法を検討し、学校での授業改善に資する取り組み（授業改善方法）を提案できる。 | |
| 新 | 変更なし | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 教科の授業設計に関する受講生の実践上の課題を明らかにし、課題の解決策として、主体的・対話的で深い学び、特別支援、ICT 活用、小中一貫教育などの視点から、多様な発達段階や環境にある児童生徒に有効な教材や指導方法を協働的に探究した。 | ・多様な視点から自己の実践課題を捉え直した様子が伺えた。<br>・視点が多様である分、個々の視点を活かした教材・指導方法について深める余裕がない様子であった | ・４月当初から iPad での発表や Google Drive を活用して文献を提供するなど、ICT 利用に慣れさせた。<br>・小中一貫教育に関する授業では現職院生の現任校紹介や視察と連動させた内容を組み込んだ。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・） |
|---|
| 夜間の授業ということもあり、授業の多い曜日ではあるが、学生は少しリフレッシュして授業に望んでいる様子であった。「教材研究、指導方法、評価に関する…」という授業名だが「評価」については充分に扱えていない（結果、他の講義科目との連動が可能になったが)。授業計画を具体化するのが遅れたこともあるが、扱うべき内容が多岐にわたり、個々の視点・テーマを関連づけ、統合することは院生に委ねる結果となった。新学習指導要領に関する発表や授業づくりの対象教科を、個人選択にしたため、発表だけで 90 分授業を複数回要すこととなった。十分な質疑時間の確保も含め、効率化を図りたい。実践的課題の捉えを、個人の力量形成に必要という捉えだけでなく、教師間の協働や組織的研修の必要性を実感させる方向でも考えさせたいが大きな課題である。 |

| 改善計画（案） | |
|---|---|
| 実践レベル | 講義の主題と扱う多様なテーマとの整合性を図るためにも、講義全体の評価計画や評価の対象物を見直したい。 |
| シラバスレベル | 特になし。みなし教員（特別支援学校）に講義を担っていただいたが、招聘時期により、授業計画の修正が、その都度、必要になる。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有・・・有<br>③その他（特になし　　） |

| 講義名 | 学校における生徒指導の実践と課題（必修） | 2018 年度【Ｔ４】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 関山 徹・今林俊一・假屋園昭彦・<br>宇都慎一郎・川田耕太郎 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | | 学習態度、授業内における討議等での貢献度、テーマごとの小レポートの３つを総合的に評価した。 |
| 現 | 理論的枠組みと対照しながら自らの実践を省察するとともに、コーディネーターとして組織的対応を実践できる | |
| 新 | 生徒指導の具体的課題について理論と関連づけながら理解するとともに、それを組織の一員として実践できる | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 積極的生徒指導のあり方とその展開方略について理解を深めるとともに、児童期・思春期の発達や道徳、ユニバーサルデザインとの相互関係についても探究した。また、さまざまな仮想事例を取り上げて討議を行い、多面的な児童生徒理解と多層的な関わりをどのように組織的に実践できるかについて検討した。 | 新卒院生は積極的生徒指導というあり方に新鮮な驚きを、現職院生はチーム支援によって厚みのある事例理解と対応方略が得られることを、事例検討等を通じて改めて実感したようであった。 | 最終日（4 コマ）では、まとめとして１つの事例を R-PDCA サイクルの段階ごとに分析と討議を行った。本授業の各テーマや関連する授業の学びを総動員しての演習となるように目指した。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

・みなし実務家専任教員とも打ち合わせを重ね、前年度の状況を踏まえつつ、展開や仮想事例を準備した。
・児童期・思春期の発達や道徳、ユニバーサルデザイン等について、理論面からもじっくりと取り上げることが出来た。最終日の事例検討では、そこで得た知見も用いての豊かな討議内容となった。
・兼担教員や見なし実務家専任教員の協力もあり、奥行きのある内容となった。また、県総合教育センターの取組（特に学校楽しぃーと）を実践的且つ詳細に取り上げることができた。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 見なし実務家専任教員が交代したとしても現在の質が維持されるように、引継体制を整備する。 |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無し<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無し<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | 特になし |
| 前年度からの改善点 | 仮想事例の検討では、前年度に要した時間を踏まえて時間配分を調整したところ、より重要な箇所に時間を割くことができた。 |

| 講義名 | 教育相談の方法と実践（必修） | 2018 年度【Ｔ４】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 関山 徹・有倉巳幸・宇都慎一郎・川田耕太郎 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | | 学習態度、授業内における討議等での貢献度、レポートの３つを総合的に評価した。 |
| 現 | 支援チームを組織して具体的課題の解決にあたるとともに、学校全体としての教育相談を計画・運営できる | |
| 新 | 教育相談で求められる共感的な関わり方を理解するとともに、それを支援チームの一員として具体的課題の中で実践できる | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 児童生徒の理解や支援について具体的に取り上げると共に、仮想事例のグループ討議やロールプレイ等を通じて、学びを深めた。また、児童生徒だけでなく保護者や教員集団の困り感や状況を理解した上でのチーム支援の方略づくりや年間計画を構想した。 | 現職院生はこれまでの児童生徒との関わり方を振り返る機会となっていたようだ。学卒院生は、教育相談の開発的･予防的な側面が学級経営に直結することに気づいた様子であった。 | 仮想事例を数多く取り上げ、心情や方略を多面的･重層的に考察させた。また、県総合教育センター調査研究発表会に参加し、他校の現職教員と一緒に事例検討に取り組んだ。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| ①みなし実務家専任教員とは事前に綿密な打ち合わせをし、現場の実情を大いに語っていただいたり、仮想事例を受講生と共に詳細に検討していただいたりして、とても内容が濃いものとなった。　②開発実践実習Ｉにおける教育支援センターでの不登校生との関わり体験について、本授業の内容となるべく結びつけるように心掛けたが、実習が終了してしばらく経過しての授業だったため、いささか浅い次元に終わってしまった印象がある。理想的には本授業が先にあってからの実習が望ましいが、授業内で可能な工夫についても改善を図っていきたい。③学習態度や授業内における討議等での貢献度の評価方法に関しては、前年度からの課題であり、引き続き検討の余地がある。　④共同担当者のリフレクション：いじめについては、社会心理学的背景について概説を行ったが、院生の様子を見ていると、単にディスカッションで意見を練り上げるだけでなく、こうした知見を提供した後に自らの実践と付き合わせて考えることが大切だと思った。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 学習態度や授業内における討議等での貢献度についての評価の具体的な観点を整備する |
| シラバスレベル | 他授業で扱う内容との関係を検討し、精選・分担する |
| 教務レベル | ①　開講期の変更の有無・・・なし<br>②　曜日や時間の変更の有無・・・なし<br>③　その他（　なし　） |
| 主なテキスト | 特になし |
| 前年度からの改善点 | 転移/逆転移から人間関係を査定する箇所では、前年度は説明のみだったため理解に戸惑う受講生もいたが、今回は演習問題を複数設けて解説したところ、理解が円滑になり、その後の議論にも応用する姿が見られた。<br>・時間配分については、内容に緩急をつけることにより改善を図った。 |

| 講義名 | 学級経営の実践と課題（必修） | 2018 年度【T1-2】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 有倉・山口・迫田・久保（附小）・山内（附中）<br>上仮屋・佐藤（附特）・宇都・川田 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 学級経営の目標や計画、課題について、受講者の作成した学級経営案や様々な実践事例を検討しながら、学級経営に関する実践力を身につける。 | 毎回のショートレポート及び授業での成果物や活動の参加状況の観察によってシラバスに掲載した３つの評価の観点を評価 |
| 現 | これまでの自らの学級経営を客観的に分析し課題を整理するとともに、効果的な改善策を立案できる。 | |
| 新 | ユニバーサルデザインに基づく学級経営の基本と課題について理解を深めることができる。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 学級経営に関する理論的な知見を紹介し、小学校、中学校の順に学級経営案作成と発表を行った。また、事例研究（インシデントプロセス法）は、小学校事例、中学校事例、保護者対応事例について現職教員学生から出してもらい、グループに分かれて検討した。 | 学級経営案をグループで検討する経験はないようであるが、昨年度のものがあるので多少は参考になっていたようであった。 | ・インシデントプロセス法に習熟してもらうために、4 回実施した。<br>・プレゼンの経験をしてもらうために、学級経営案の発表は、小学校案はポスターで、中学校案はパワーポイントで実施した。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

昨年度の反省も受けて実施したので、うまく進められたと思う。昨年度と違うところは、私が全体の進行をすべて行うのではなく、小学校の学級経営案作成は山口先生、中学校の学級経営案作成は迫田先生が主となって進めてもらった。それぞれの先生の持ち味が活かされた授業であった。また、学級経営案作成とともに、学校の事例研究で活用されるインシデントプロセス法を複数回行った。現職教員学生には、馴染むまでやってもらうことで、現場に戻っても活用できるようになることを期待したい。

今年度も、みなし実務家の先生方が現場の視点からコメントしていただいたことで、プレゼンやディスカッションしたことがうまく整理できたのではないかと思う。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 事前にデザインシートを作成することにし、山口先生、迫田先生にも作成してもらったが、それを活かしての打合せに充分な時間がとれなかった。また、みなし実務家の先生方にはコメントをもらうだけにとどまった。今後、担当者で協議し、みなし実務家教員の専門性を発揮してもらえるような活動内容を検討したい。 |
| シラバスレベル | 前期は木曜 2 限がないこともあり、毎回 90 分ではなく、4 回は 2 コマ続きで行った。学級経営案の作成や県総合教育センターから来てもらう上ではよかったように思うので、今後もこうした形で進めていきたい。 |

| | |
|---|---|
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無　　・・・無　【変更内容　　】<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無　【変更内容　　】<br>③その他（　回によって、2 限連続で実施　） |
| 主なテキスト | 蓮尾直美・安藤知子　2013　学級の社会学　ナカニシヤ出版<br>スクールプランニング制作委員会×学級づくり研究会編　2016　学級経営計画ノート　学事出版<br>白井利明　2001　図解　よくわかる学級づくりの心理学　学事出版<br>白松　賢　2017　学級経営の教科書　東洋館出版社 |
| 前年度からの改善点 | 研究家教員がすべて主担当で実施するのではなく、学級経営案については、経験のある実務家教員に主担当をしてもらった。 |

| 講義名 | 自律的学校経営の基礎と応用（必修） | 2018 年度【T1-2】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 髙谷・海江田・山口・迫田 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 1：公教育および学校教育が現在直面している課題の特徴を把握する<br>2：他者と協働しながら探究を進めていく力と対話をファシリテートしていく技術を獲得する | ・講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート）<br>・授業内における報告担当回のファシリテートならびに討議等での貢献度 |
| 現 | 1：これからの学校に求められるマネジメントの手法や先行事例にみられる成功要因を理解する<br>2：自律的学校経営に求められる管理職ならびに教員の力量について、その中身と育成方法を論じることのできる専門的見識を獲得する | |
| 新 | 1：公教育の役割と自律的学校経営に求められる要件を理解する<br>2：学校組織の特質と自律的学校経営の実現において求められる教員の役割について理解する | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 受講者自身が講義内の演習をファシリテートし、担当教員も学習者と共に演習に取り組む学習形態にて、自律的学校経営についての理解を深める。また、学校という組織の特徴とそこでのマネジメントをどのように考えていけばよいのか、多面的に考察できる専門的見識を獲得することを目指した。 | 受講者は演習のファシリテートには積極的に取り組んだが、グループでの対話や全体での対話では互いに遠慮し発言を控える傾向が見られた。 | 受講者による演習のファシリテート・課題の協働探究等、協働と能動的な学習スタイルを通して、学校現場において同僚や他者との協働によって自律的な探究と学校づくりを進めて行く際に必要となる力やスタンスの獲得も狙った。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

受講者自身による学習のファシリテートについては、追加資料・情報を準備してきたり、対話や思考方法を独自に工夫したりするなど、各々が前向きに取り組んでもらえたと評価できる。

その一方で、文献の内容に関する専門的な理解の深まりは不十分なまま進む場面が散見された。また、現職院生は自身の経験や現実の制限にとらわれた思考におちいる場面が多く、ストレートマスターは現職経験がないことから「経験がない」ことを理由に発言を遠慮したり思考停止したりする場面が散見された。

それぞれの立場に起因するとらわれから脱却することができない学習者に、どのようにそのとらわれから脱却し純粋に学問し実践的思考につなげていってもらうかが課題となった。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 受講者の立場による様々なとらわれへの対応を考える必要がある |
| シラバスレベル | 立場を超えて純粋に学ぶためのオリエンテーション・技術を獲得する回が必要となるかもしれない |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | なし |
| 前年度からの改善点 | 専門的な知見の理解が不十分な際には解説を行う機会を増やした |

| 講義名 | 学校教育の役割と教師の成長（必修） | 2018 年度【T3-4】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 髙谷・原之園 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 学校教育が担っている社会的役割と教職の専門性についての見識を深め、教職に携わる者としての自己のあり方を省察し、今後の自己成長に係る機会を自ら創出することのできる力を身につける | ・講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート）<br>・授業内における報告担当回のファシリテートならびに討議等での貢献度 |
| 現 | 教師集団全体の専門性向上に求められる要件を理解し、その方略について計画できるようになる | |
| 新 | 教師としてのアイデンティティと力量形成の方途についての理解を深める | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 学校教育が果たす役割、教師が直面する課題にみられる特徴、教師はどのように成長していくのかなどについて、学校教育の役割と教師の成長に関する最新の研究知見と実践に学ぶ。そこから、教師の専門性をどのようにとらえるのか、専門性の向上はいかなる条件下で促されるのかについての理解を深め、教師の成長の舞台をデザインできる実践的力量の獲得を目指した。 | テキスト文献から教師の成長の特徴やそれを支え促す要素についての理解は確実になされていた。その一方で、専門的な概念について学ぶ機会が少ないためか、抽象的な概念の理解に課題が見られた。 | テキスト文献だけでなく、教師の成長や発達に関する専門知見を学ぶことのできる追加の文献を選定し、その都度配付して学習を進めた。また、抽象的思考が難しい場面では、構造化して図説するなどして理解を支援した。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 教師の成長に関する事例を読み解く学習については、具体的にイメージしながら学びを深めることが現職教員とストレートマスターの両者において確認された。一方で、現職教員においては、自身の学校においてどのように教師の学びや成長の機会を実現するかについての悩みが増した側面が、ストレートマスターにおいては、これから自身が教職に身を置くにあたっての不安が増した側面も確認された。また、専門書や概念的な論述を読み解いていく学習スタイルへの困難を覚える学生が少なくなかったため、次年度以降さらなる工夫が必要だと感じた。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 文献の内容を深く読み解き解釈していく学び方を工夫する |
| シラバスレベル | 各回の講義内容間の余裕をもう少しもたせる |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | グループ・ディダクティカ編（2012）『教師になること、教師であり続けること』勁草書房。 |
| 前年度からの改善点 | 専門的な知見の理解が不十分な際には解説を行う機会を増やした |

| 講義名 | 鹿児島における学校教育と教員のあり方（必修） | 2018 年度【集中】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 海江田修誠　原之園哲哉　川田耕太郎 | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 本県の特徴的な教育施策の内容を理解する。<br>本県の教育課題の解決策について、ユニバーザルデザイン、ＩＣＴ、アクティブラーニング、少人数教育、小中一貫教育等の視点を踏まえながら考察し、適切に説明することができる。 | 「ふりかえりシート・課題の記入状況」,「グループ討議等への参加・貢献度」,「施策提言の深まり・説得力」を総合的に評価 |
| 現 | 本県の教育力を底上げするためのファシリテーションができる。 | |
| 新 | 本県の教育上の課題を分析し実践することができる。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| Ⅰ期（４～６月）で教育施策に触れさせるとともに、テーマを設定し意見交換<br>Ⅱ期（６～12 月）坊津学園、桜島の小中学校、県立高等特別支援学校の３校を訪問<br>Ⅲ期（12～２月）施策提言を作成し発表会を実施 | 昨年同様、１年かけた結果として成長の様子は見られた。最終的な施策提言としては、働き方改革や人員配置を求めるものが多かった。育休取得率の向上や夜間中学の設置などユニークな提案もあった。 | 入学当初，小中学校の現場感を払拭するために、教育行政や高校からの視点にふれさせるようテーマを設定した。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| シラバスに「グランドデザインを作成しプレゼン系形式で発表させる」とあるため、ある程度の“成長”を待って発表時期を第４タームに設定しているが、一方、教育行政の視点にはできるだけ早く触れさせたいとの思いから第１タームから始めざるを得ないと考えるため、集中講義とは言え、結果的に通年の授業になっている。その間をⅡ期として、坊津学園、桜島の小中学校、高等特別支援学校の３校を訪問したが、学生の評判は良かった。ただ、訪問に授業時間をかなりとられて講義の時間が限られてしまうこと、また、桜島の小中学校訪問は、直前が噴火がひどく心配したこともあって、次年度は少し整理しようと思っている。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 学校訪問にかかる時間を少し減らして、年度当初の本県の教育を考える時間を増やそうと思っている。 |
| シラバスレベル | 次年度の前半までの状況と、今後の改編を予想して、検討したい。 |
| 教務レベル | ①　開講期の変更の有無・・・無<br>②　曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③　その他 |
| 主なテキスト | 鹿児島県の教育振興基本計画、施策概要等 |
| 前年度からの改善点 | 前年度を概ね踏襲　次年度は若干変更を予定 |

| 講義名 | 学校教育におけるデータ分析とその活用（必修） | 2018 年度【T1】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 有倉・假屋園・山本 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 教育データを適切に分析し、エビデンスとして用いることができる。また、目的に応じた計画を立て、調査及び資料収集をすることができる。 | 課題提出（70%）及び授業中の活動（ディスカッションやプレゼンテーション；30%） |
| 現 | | |
| 新 | | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 評価・改善に向けて、現状理解のための調査計画の立案、実践によって得られたデータをはじめ、公開されている様々な教育データの分析と読み取り、これらから得られた知見をどのように教育活動の改善につなげていくかを検討していく。 | Excel を用いて、課題として与えたデータ分析を行わせたが、操作の得手不得手がはっきりしていた。 | 新聞記事等に掲載されている調査データとコメントを事例として挙げて、データ収集の仕方等の問題点を考えさせた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 昨年度もであったが、協働して授業を作るという形が充分に活かせなかった。<br>学生の探究課題を考えると、もっとフィールドワーク等で扱う質的データの分析について時間をとり、その方法論を学んでもらいたいと思った。<br>併せて、教職課題研究Ⅰ・Ⅱなど、他の授業との関連を検討して、内容を見直したいと思う。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 授業で実施する内容や進め方について、見直しを図る。また、到達度を評価する課題や観点を工夫する。 |
| シラバスレベル | 「教育データを適切に分析し、エビデンスとして用いることができる。また、目的に応じた計画を立て、調査及び資料収集をすることができる。」という到達目標、及び授業回数が適切かどうか、検討が必要。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無　　・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト（参考図書） | 西内　啓　2013　統計学が最強の学問である　ダイヤモンド社<br>西山敏樹・鈴木亮子・大山幸周　2013　アカデミックスキルズ　データ収集・分析入門　社会を効果的に読み解く技法　慶應義塾大学出版会<br>谷岡一郎　2000　「社会調査」のウソ　リサーチリテラシーのすすめ　文春新書 |
| 前年度からの改善点 | 特になし |

| 講義名 | 学校安全と危機管理（選択） | 2018 年度【Ｔ４】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 関山 徹・黒光貴峰 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | | 学習態度、授業内における討議等での貢献度、レポートの３つを総合的に評価した。 |
| 現 | 学校安全と危機管理の基本的な知識と対処法を身につけるとともに、それを組織の一員として実践できる | |
| 新 | 学校安全と危機管理について、組織の中核的な立場から準備・運営・改善ができる | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 防災教育のあり方とその実践例をとりあげて、鹿児島県における課題を検討した。さらに､学校災害時における心理ケアを組織的に行っていくための方略や保護者･地域との協働について学び､心の減災教育のための授業づくりを検討した。 | 受講生３名、聴講生５名（最大 11 名）。災害時の安全確保や心理的ケアについての重要性に気づき、そのための組織的対応のあり方について熱心に討議する姿があった。 | 気象台職員を招いて、大雨・津波防災に関するワークショップ型の授業を行った。また、トラウマ反応の変遷のグラフの読み解きや奄美豪雨災害事例の検討、児童向け心理教育用の授業案づくり等に取り組んだ。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

・黒光先生の一部の回では、気象台職員を招いての内容になり、内容に深みが加わったとともに、気象台としても児童への説明方略について受講生から意見が聴取でき、双方にメリットのある取り組みとなった。今後は、他の回についても、仮想事例検討の際などに、管理職経験のある実務家教員から危機管理についてのコメントをいただくなどの工夫をして、より実践性を高めていきたい。

・事件事故災害の時だけでなく、日常からの取り組みが非常時にも応用できることが多いことにも受講生が気づき、課題や取り組みの具体をイメージできた点は成果があった。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 仮想事例の検討については、授業担当者以外の教員にもコメントをもらうなどして助力してもらい、より多様な観点からの省察が出来るようにしたい。 |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ① 開講期の変更の有無・・・無<br>② 曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③ その他（　　） |
| 主なテキスト | 特になし（随時資料を配付） |
| 前年度からの改善点 | 心の減災教育の授業案づくりでは、課題を焦点化することにより、限られた時間内で取り組みやすいものに改善された。 |

| 講義名 | グループダイナミックスからみた学級経営（選択） | 2018 年度【Ｔ３】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 有倉・久保（附属小）・久徳（附属中） | みなしの有無 | 有 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | | 毎回のショートレポートや授業での参加の様子、総括レポートによってシラバスの３つの観点を評価 |
| 現 | これまでの学級経営をグループダイナミックスの知見から省察した上で、改善プランを提案できる。 | |
| 新 | 学級経営に関して、グループダイナミックスの知見から省察できる。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 2 コマ続きの授業なので、今年度は、前半にグループダイナミックスの知見を講義し、後半で課題を出し、小グループでディスカッションしてもらった。 | 組織経営をテーマに考えた学生たちにとっては、次年度の探究課題の参考になった学生が少なからずいた。 | 次年度の教職課題研究Ⅱにつながるよう、学級集団だけでなく、教職員集団にも適用できるような知見を提供し、考え話し合う機会を設けた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 今年度は、選択科目にもかかわらず、受講生が 12 名と多く、集団心理や組織行動への関心の高さが窺えた。みなし実務家教員には、授業の様子を参観・コメントしてもらい、附属小・附属中の学級経営についてそれぞれから話をしてもらった。学生にとっては、前半で提供した知見を踏まえてそれぞれの学級経営のよさを理解してもらったが、できれば、久保先生、久徳先生には最初から入ってもらった方が、両先生にとってもうまく関連させて話を組めたように思った。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 昨年同様に授業デザインシートを作成したが、みなし実務家教員とは見通しを持って検討の時間を持てたとは言えなかった。より早期からの打ち合わせが必要だった。 |
| シラバスレベル | 次年度は、自身の探究課題につながるような制作物を作ってもらって、評価方法に採り入れたい。また、講義だけでなく、専門書を読む機会をもっととって、テーマを深めてもらいたい。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無　　・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | 吉田道雄　2001　人間関係のグループダイナミックス　ナカニシヤ出版 |
| 前年度からの改善点 | 前年度の反省をもとに、ディスカッションの時間を長くとった。 |

| 講義名 | 学校づくりと教師 | 2018 年度【T1-2】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 髙谷 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 学校づくりの本質を理解するとともに、教職の使命を認識し学校づくりに積極的に取り組むことのできる実践的・専門的力量を身につける | ・講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート）<br>・授業内の演習や討議等への貢献度 |
| 現 | ・学校づくりの中核を担う者に求められる専門性・力を理解する。<br>・主体間の協働をマネジメントすることのできる力を獲得する。 | |
| 新 | ・学校教育の果たしている機能に関する理解を深める。<br>・学校づくりにおいて自身が果たすべき役割を明確化する。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 公教育の役割とそこで学校教員の果たす役割について考える。そのために、学力保障、人格の形成、社会化を核とした学校教育の果たしている機能のもと、充実した教育実践を実現している学校の実践事例を読み解き学ぶ。教師、子ども、保護者、地域住民、行政間の協働のあり方についても事例をもとに理解を深めるとともに、教育を受ける権利の保障を具体的にはどのような営みとして理解すれば良いかについて考えた。 | 講義内の演習や対話、ディスカッションには、多くの受講生が積極的に参加し、自身の考えを率直に語り合うことができていた。一方で、持論を主張するにとどまり、他者とともに新たな知見や解釈を作り上げたり追究したりしていく姿勢の見られない学習者もいた。 | 多くの学校で当たり前だと思われていることが、いかに当たり前ではないかに気づいてもらうことを重視した。また、現実の困難や条件を理由に思考を停止させることに対してはその姿勢を厳しく問い直させた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 事前予習、講義内の演習・ディスカッション、事後考察などには、受講者全員が積極的に取り組んだ。ストレートマスターと現職教員の、それぞれの立場からこそ導き出される考えや発想に学び合うこともできていた。しかし、思考の内容が経験に基づく発想に制限されてしまっており、先進的な事例や専門的な知見から新たな発想や学びを得ようとする思考が生まれない受講者も見受けられた。近年の教育の動向や実践例ではなく、教育の本質や哲学・思想、教育方法学や教育史の学問的知見を丁寧に学ぶ必要性の方が強く感じられた。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 事例を通したディスカッションよりも、学問的知見を対話を通して読み解く学習方法への変更が必要だと考える。 |
| シラバスレベル | 来年度は最新の教育動向や実践事例よりも、教育原理・教育方法学・教育社会学等の学問的知見を丁寧に学ぶ構成に大幅に変更する。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | なし |
| 前年度からの改善点 | 受講生自身に講義内の演習をファシリテートしてもらう学習スタイルを中止し、担当者による対話・演習のファシリテートへと変更した。 |

| 講義名 | 校内研修のデザインとマネジメント | 2018 年度【集中】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 髙谷 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 校内研修の企画・運営に関する理論と実践について学び、教師の成長を支え促す校内研修を企画・運営することのできる実践的・専門的力量を身につける。 | ・授業内における演習・討議等への貢献度<br>・講義全体を通した学びをふり返り意味づける最終レポート課題 |
| 現 | 教師の成長にみられる特徴と整合した校内研修を企画し、マネジメントすることのできる力を獲得する | |
| 新 | 校内研修において求められる研究的考察力と対話力を獲得する | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 教師の実践的知識の特徴と、教師の成長にみられる特質から、校内研修に求められる要件を理解するとともに、そのような要件を満たした研修はいかにデザインし実施することで実現するかを、学術的知見といくつかの事例を対象に実践的に学んでもらった。また、実際の校内研修・授業研究へのフィールドワークとリフレクションの機会も提供し、それらを専門的な知見から意味づける演習も豊富に提供した。 | 現職教員学生がこれまでに感じてきた校内研修や授業研究の問題点と、それを実際にどのように解決していくかが話題となることが多かった。また、校内研修のフィールドワークならびにケーススタディは、専門的な知見を具体的な実感を伴い学びとることに寄与していた。 | 教師の集団での専門的な学びの特徴とその実現方法について、最新の研究知見と実際の事例から具体的にイメージを持ちながらまなべる学習機会を提供した。また、実際に学びの場をどうデザイン・マネジメントするかを実演する演習を取り入れた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 集中講義としての実施のため、3 コマ連続での実施やフィールドワークの実施など、学習内容に応じて様々な学習形態・経験を提供することが可能となった。また、いくつかのコマを夜間の時間帯に開講することで、現職教員や他職種の社会人など、多様性に富んだゲストにも参加し共に学んでもらうことが可能となり、それが受講者の学習に与えた影響が極めて大きかった。多様な他者の存在と集団での対話を通した学びが、いかに専門家の学びを促進し深めるかを実感しながら学べたという受講者の感想が、それを意味しているといえる。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 本年度の取り組みをさらに発展させていく。 |
| シラバスレベル | そのときその状況に応じて変更や改変が可能な内容にしておく。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | 鹿毛雅治・藤本和久編著（2017）『「授業研究」を創る—教師が学びあう学校を実現するために—』教育出版。 |
| 前年度からの改善点 | 授業を外部にも開き、様々な立場の人との交わりの中で専門的な知見を学び合う機会を設定した。 |

| 講義名 | 学校経営と組織マネジメント（必修） | 2018 年度【Ｔ２】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 有倉巳幸・(教職員支援機構) | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | | 終講レポート課題 |
| 現 | ・組織マネジメントの考え方や進め方について基本的な理解を深める。<br>・特色ある学校づくりや学校組織、教員集団をマネジメントできる力を身につける。 | |
| 新 | | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 南九州プラットフォームと教職員支援機構との合同セミナーを活用した授業であり、第２回～第 13 回までは３日間の集中講義となっている。教職員支援機構から派遣される講師による授業と、オリエンテーション、セミナー後のリフレクションから構成されている。 | 受講対象者は現職教員学生のみ。熱心に受講していた。 | 合同セミナーを活用することで、カリキュラムマネジメントやアクティブラーニングの専門的な知見及びワークショップがふんだんに取り入れられている。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

南九州プラットフォームと教職員支援機構との協定が結ばれ、今年度から実施することになった。8 月上旬の３日間で 49 名の参加者を得られた。教職大学院の学生もＭ１だけでなく、都合をつけてＭ２も参加してくれた。附属中学校のホールを借りて実施したが、講義だけでなく、ワークショップも非常に盛り上がっていた。初めての取り組みという意味では、教職員支援機構のセミナーをこのような形で開催するのも全国で初めてとのことである。

最後の省察の授業では、校長経験のあるスタッフ４名の学校経営論を語ってもらい、質疑応答もあり、合同セミナーで培った学びを踏まえて、体験談を聞くことでイメージしやすくなったのではないかと思われる。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | できれば、大学院間で交流できるように、熊本大学教職大学院からももっと受講できるような方法を考えたい。 |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無　　・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | なし |
| 前年度からの改善点 | 特になし |

| 講義名 | 子どもと教師の心の健康マネジメント（選択） | 2018 年度【T1-2】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 関山　徹 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | ストレスマネジメントの基本について理解し実践できるようになる | ・授業内の討議における参画状況<br>・期末レポート |
| 現 | ストレスマネジメントの基本を身につけるとともに、それを児童生徒との関係や自分自身の生活の中で実践できる | |
| 新 | ストレスマネシジメントを個々人の教育実践の中で行うだけでなく、それを同僚と共に展開できる | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 教師が自身と児童生徒の精神的健康を維持･増進するために必要な知見と対処法を身につけるために、ストレスの仕組みとそのマネジメントの仕方を学び、それを児童生徒との関わりや教師同士の関係の中で活かす方略について取組策を構想し、受講者同士で討議した。 | 教師自身のストレスについて扱うことに驚きを感じつつも、熱心に受講していた。また、社会的支援の重要性を新鮮に受けとめ、それを実現する組織づくりについて真剣に討議していた。 | 知的な理解に留まらないように、継続的にリラクセーション法を体験しながら進めた。また、学校における協働的実践のための方策を全体で討議した上で、各自でレポートにまとめさせた。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

・受講生からは「毎週金曜日に自分のコンディションをふりかえることができてよかった」「これまでの子どもとの関わり方を反省した」等の感想が寄せられ、さまざまな次元でのリフレクションに役立ったようだ。

・ひとりの人間としての感覚や子どもの思いから考えてもらうよう演習を多くしたが、理論的な側面との対応関係をもっと意識させる必要がある。また、演習で扱った仮想事例は、１つひとつを短くしても、たくさんの数を取りあげたほうがよいかもしれない。

・協働的実践（社会的支援が豊かな学校づくり）の面をより強調していきたい。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | ①学校における協働的実践に関する討議の時間配分を増やすことにより、取組案をグループ討議でさらに改善できるようにすることと、②心理学的な研究知見との対応関係についてより意識させること、を目指す。 |
| シラバスレベル | 内容の時間配分の検討を行う |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無　　・・・無し<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無し<br>③その他（　無し　　） |
| 主なテキスト | 特になし（随時、資料等を配付） |
| 前年度からの改善点 | 前年度は教科書を用いたがやや抽象的で難解だったので、今年度は随時配付の入門的水準の資料を活用したところ、戸惑いが減り理解が深まった。 |

| 講義名 | 授業研究の理論と実践（選択） | 2018 年度【Ｔ１】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 廣瀬真琴 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 授業研究の意義や要点、そのデザイン方法を理解できる | ・授業研のデザイン（生産物）<br>・運営の実際（観察） |
| 現 | 授業研究の全体像（目的や意義、手続きやツールの活用法等といった運営レベル）を批評し、改善策を検討できる | |
| 新 | 授業研究を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 授業研究に関連する様々な諸経験（教育実習や模擬授業、校内研修等含む）を共有し、自己の疑問点や、研究会として改善が必要な点を明確化していく。次いで、授業研究に関連する諸理論を習得することによって、授業研究の意義や多様性を把握し、自己の経験を相対化する視座を得る。講義内容を踏まえて、授業研究会を企画運営し、参加者の評価を得る。 | ・授業研究に関する経験の共有は、受講者同士で共感する部分があったようだ。<br>・受講生は、授業研究を民主的な学びあいの場にするための工夫の議論を、民主的に進めていた。 | ・最悪な授業研究の要点を逆転し、授業研究に求めたい基礎的な要件を導出させ、受講生間で共有した。<br>・要件を実現するために理論や事例の収集・学習をはかり、その成果を持ち寄るジグソー学習を展開した。<br>・授業研後に会のデザインを振り返る時間を設けた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 昨年度と同様、会の企画運営をデザインする経験を有した受講生がいなかった。それゆえ、「時間をかけて取り組む必要があるし、教職大学院にいる今だからできることである」と、講義の主旨を理解してもらえたようである。また、ネガティブな経験を語ることで、共通体験を見出せたようである。互いをよく知らない 1t の時期に適した課題であると考えられる。役割分担と共有の学習場面において、建設的な意見やアイデアを提供しあっていたが、時折生じた合意形成が必要な場面において、互いの価値観やメンタルモデル（←講義内容）への気づきが生起していたようである。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | ・会の振り返りに、もう少し時間を割きたい。<br>・授業研の実施後、デザインを修正する活動時間をもう少し取りたい。 |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（特になし　　） |
| 主なテキスト | エリザベス・A・シティ他（2015）『教育における指導ラウンド:ハーバードのチャレンジ』風間書房（監訳：八尾坂修） |
| 前年度からの改善点 | 昨年度より受講生が多少増えたこともあり、個別の学習をチーム単位で確認したり共有したりする時間を設けたが、「チームとして」という意識が働いたためか、質問がよく出るようになった。 |

| 講義名 | 学校研究の手法と実践（選択） | 2018 年度【T1-2】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 髙谷・下古立・山元 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 学校における各種教育活動の開発・評価の手法を身につける | ・講義ポートフォリオとしての記録シート（予習・演習課題・レポート）<br>・授業内の演習や討議等への貢献度 |
| 現 | 自律的に教育活動の開発を進めるための実践研究手法と運営方法を身につける | |
| 新 | 学校の教育活動の社会的意義と特徴について理解する | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 学校研究ならびに質的調査法に関する専門書をテキストに、学術的な理論と具体的な実践事例の分析・考察を通して、研究と質的調査法についての基本を学ぶ。同時に、自律的に教育活動の開発を進めていく際に求められる実践研究の手法と学校としての営みを運営する方法をについて考察する。 | 質的調査法についての基礎的な理解は得られた様子だった。一方で、研究といえば量的調査というイメージが強固に根付いており、質的調査の意義や価値、方法については理解が困難な様子だった。 | できる限り受講者の抱いた疑問や関心にリアルタイムに対応しながら講義を進めるとともに、講義内容の組み替えも柔軟に行った。また、高度化実践実習Ｉのタイミングとあわせてフィールド調査の方法に関するレクチャーも、実施した。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 事前の予習から生起した個々の問題関心や疑問を取り上げながら、その場で授業内容・追究課題・展開を構築・デザインすることができた。講読文献をもとにした具体的な学校研究の開発・運営・評価方法についても、要点を確認することができたと思われる。また、量的調査の感覚しかなかった受講者にとって、質的調査の方法についての学びは衝撃的に受け止められたようで、受講者の中で研究や調査に対するイメージの大幅な変容もみられた。<br>一方で、実践研究の進め方や教育実践をどう調査するのか、どうみるのか、どう記録するのかといった点については、なかなかイメージができないようで、理解の深まりという点では課題が残った。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 質的調査法について実際に実践的に取り組む機会を増やす必要がある。 |
| シラバスレベル | 質的調査法について実際に実践的に取り組む回を設定する必要がある。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・有<br>②曜日や時間の変更の有無・・・有<br>③その他（　　） |
| 主なテキスト | 未定 |
| 前年度からの改 | 質的調査法について専門的に学ぶ機会を大幅に増やした。 |

| | |
|---|---|
| 善点 | |

| 講義名 | 総合的な学習のカリキュラム開発（選択） | 2018 年度第【Ｔ３】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 廣瀬・奥山 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 総合的な学習の意義や要点、そのデザイン方法を理解できる。 | 生産物（総合的な学習のカリキュラム案） |
| 現 | カリキュラム（単元レベル）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる。 | |
| 新 | カリキュラム（複数学年・教科横断的）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 総合的な学習のカリキュラム開発に関する理論や事例の収集及びデザインを行う。授業・単元＜学部新卒学生＞や、年間指導計画や全体計画など＜現職教員学生＞のデザインや修正に取り組み､総合的な学習のカリキュラムを構築･批評する力量を培う。 | 自校のカリキュラムを他事例と比較しながら改善案を検討していた。勤務校や校区で情報を収集したり、他者と対話しながらカリキュラムの開発を進める姿が見られた。 | 昨年度同様、新学習指導要領や事例などを参照しつつ、自己の勤務校のカリキュラムをチェックしたり、校区の地域の資源を確認したりするなどして、具体的にカリキュラム開発が推し進められるように留意した。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・） |
|---|
| やはり、学校現場では、総合的な学習については、いつの間にか誰かが作成した内容を引き継いで行うことが多いようである。受講生の活動をみるに、何を行うかのイメージはあっても、何を学ぶのか（資質能力）については、意識してこなかったように感じた。また、問題解決のサイクルと、単元展開とが連動することについて、これまでは意識してこなかったように思う。楽しそうに、そして真剣に取り組む姿が見られた。総合についてカリキュラムを開発したり、改善したりすることの面白さは感じ取ってもらえたように思う。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | ・開発したカリキュラムについて相互批評する時間を、もう少し捻出する<br>・改善点とその理由（意図や根拠、背景）を明確にするように留意する |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>【変更内容　　】<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>【変更内容　　】<br>③その他（特になし　　） |
| 主なテキスト | 田村学（2017）『平成 29 年版 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』明治図書出版 |
| 前年度からの改善点 | 受講生が改善を進める上で利用するフレームや他事例を丁寧に紹介する時間をとった。 |

| 講義名 | ICT 活用と授業デザイン（選択） | 2018 年度【Ｔ３】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 山本・下古立・山元 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | ICT 活用に関する授業デザインの実践的な手法を省察・習得する | 実施した模擬授業の指導案，研修企画書，課題レポート |
| 現 | 児童生徒が情報端末を活用した授業の実践的な指導力を身につける | |
| 新 | 授業中に教師が ICT を活用して指導する実践的能力を身につける | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 児童生徒の情報端末活用を取り入れた模擬授業を実施し、ICT 活用に関する授業デザインの実践的な手法を省察・習得した。また、各教科等での具体的な活用場面を取り上げ、個別学習や協働学習での指導方法を考察・分析するようにした。 | ・各自で指導案や教材を作成して、模擬授業を実施することができた。<br>・実際に ICT を活用した授業を参観し、実践的な手法を考察していた。 | ・発問や板書、ノート指導等の従来からの指導との関連を考慮した活用方法を探求するようにした。<br>・毎時間の開始時に、デジタルポートフォリオへの入力を行い、前回の振り返りを行うようにした。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

院生が ICT を活用した模擬授業を実施して、実践的な手法から授業デザインの重要性を学ぶことができた。従来の授業設計の考え方だけでなく、インストラクション・デザインの考え方を取り入れ、教育工学的なアプローチによる授業づくりの重要性に触れるようにした。特に、情報活用能力の育成として、プログラミング教育に関する教材を用いて、プログラミング的思考の育成を取り上げるようにした。実施した授業は、ビデオカメラ等で撮影するようにし、授業の省察を各自で行うようにし、授業実施後の感想をまとめるようにした。特に、毎時間の開始時に、デジタルポートフォリオへの入力を行い、前回の振り返りを行うようにした。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | ICT 環境が十分でない現任校の院生（現職教員）については、実習の授業と連動させて、タブレット端末等を大学から貸し出して次年度の実習や授業実施ができるように配慮する。 |
| シラバスレベル | 特になし。受講生の実態に応じて，タブレット端末活用だけでなく，プログラミング教育や情報モラル教育を取り上げるようにする。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（特になし　　） |
| 主なテキスト | 適宜資料を配付 |
| 前年度からの改善点 | ICT 活用に関する研修の企画を授業の中で実施. |

| 講義名 | 人口減少社会での ICT 活用の役割（選択） | 2018 年度【Ｔ１】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 山本・下古立・山元 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 遠隔地での授業や研修における実践的指導方法を身につける | 課題レポート<br>指導案 |
| 現 | 小規模校への学習支援での課題解決を探求することができる | |
| 新 | 模擬授業を通して、対面と ICT を組み合わせた指導方法を習得する | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 人口減少社会での教育課題の解決に向けた ICT 活用として、テレビ会議や e ラーニングシステムを取り上げ、実際に遠隔授業を実践し、遠隔地での授業や研修における指導方法を省察・習得した。また、小規模校への学習支援での課題解決を探求し、遠隔授業での実践的指導方法を習得することができた。 | ・チームを編成して、テレビ会議システムを活用した遠隔授業を実践した。<br>・離島実習に向けての準備や連絡調整としても遠隔システムを活用していた。 | ・チームを編成して遠隔授業の教科を決めて、指導案や教材作成の準備を協働で行うようにした。<br>・附属小と三島小との遠隔合同授業を実践してもらい、実際の児童の様子を観察できるようにした。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| 受講者全員が参加して、離島（三島村）との遠隔授業を協働的に実践することができた。講話等で小規模校が抱える教育課題を理解し、徳之島町や高森町などの先進地域の学校とテレビ会議でつなぎ、小規模校で遠隔合同授業が必要であることに理解を深めることができた。日本科学未来館と接続して、専門施設との合同学習を体験させた。附属小学校と三島小学校との遠隔合同授業を参観して、児童どうしの学び合いを考察するようにした。実施した授業は、ビデオカメラ等で撮影するようにし、授業の省察を各自で行うようにし、授業実施後の感想をまとめるようにした。新卒学生が授業を実施する場合には配慮が必要であると感じた。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 附属小学校と三島小学校との遠隔合同授業について、前年度に調整を行い、計画的に実施できるようにする。また、院生による遠隔授業についても、学校が希望する学年や教科、単元等の調整を早めに行うようにする。 |
| シラバスレベル | 特になし。三島小中学校との遠隔授業を継続するとともに、他地域の学校との遠隔授業を実践できるようにする。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（特になし　　） |
| 主なテキスト | 印刷物を配布 |
| 前年度からの改善点 | 日本科学未来館と接続して、専門施設との合同学習を体験させた。 |

| 講義名 | 道徳の授業デザイン論（選択） | 2018 年度第【T3-4】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 假屋園・山内・古園 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 道徳の授業構築に必要な心理学，哲学，倫理学の理論を理解する。理論と実践の関係について自覚と理解をもってもらう。 | 最後の 3 週間で，院生に一人 30 分の模擬授業を実施し，その内容で評価した。 |
| 現 | 実践には理論面の根拠が必要だという認識をもってもらう。理論はどのように実践を生み，実践はどのように理論を変えるのかを理解する。理論と実践の双方向性を理解する。 | |
| 新 | 理論を学ぶことの意義を理解する。道徳に必要な理論にはどのような分野があるのかを理解する。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 道徳の授業構築に必要な理論を講義し，理論と実践の関係についての自覚を喚起した。次に，道徳の学習指導要領の内容項目に関連した，心理学，哲学，倫理学の理論を講義した。 | 全員が熱心に受講し，知識を吸収しようという姿勢が見られた。講義の途中で随時，疑問点が出されたので，一方的な講義ではなく，双方向的なやりとりができた。 | 「発問作り」といった技術的な話はあえてせず，「人間とは何か」，「道徳的価値とは何か」，「問いかけるとはどういうことか」といった根底の話を続けた。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて・・・） |
|---|
| 假屋園が担当した回は根底となる理論だけを徹底して講義した。講義の目的は「実践に理論は関係ない，理論は役に立たない」という発想を払拭することにあった。したがって，理論の内容とともに理論の性質，理論の価値，実学とは，理論と実践の関係について講義した。受講者は熱心に聴いていたし，講義中，随時，疑問や意見も出してくれて，大学院らしい授業ができた。最後の模擬授業は講義で扱った理論を発問や授業展開に生かそうという姿勢が見られ，内容のある模擬授業だった。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 評価として模擬授業を導入したことによって，理論を実践に生かす体験ができた。 |
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・第１ｔから第 3，４ｔに変更した。<br>②曜日や時間の変更の有無・・第１ｔ水 4，5 限目連続から，第 3，４ｔの水 6 限目にした。<br>③その他…特になし |
| 主なテキスト | 假屋園の論文のほか必要な資料を随時配布し，古典的名著を紹介した。 |
| 前年度からの改善点 | 評価をレポートから模擬授業に変更した。90 分で 30 分の模擬授業を 2 本，模擬授業についての議論を 30 分とした。 |

| 講義名（選択） | 初等･中等教育における協働的指導法開発（選択） | 2018 年度【Ｔ２】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 奥山・下古立・山元 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共通 | ・教員の資質能力や指導方法について、様々な観点から考察することができる。特に、異校種・異教科の教員が協働的に授業を設計し、学年の発達・学習内容のつながり等に留意した、指導方法の構築を行うことができる。<br>・（小中一貫教育、ICT 活用等）現代的な教育課題に対応する手法を踏まえた学習指導法及び評価方法を提案できる。 | 授業、授業内における討議等での貢献度、総括レポート |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 初等･中等の教科領域における学業指導や学習指導の在り方について、児童生徒の９年間の学びを系統的･横断的に考察し、本県の重点課題である学力向上の解決に結び付く、効果的な指導法について具体的に開発していく。 | ・自分の実践や他授業での学びを振り返る機会となった。<br>・協働での授業づくりを実施したため、それぞれの経験や知見を生かしつつ、意欲的に取り組むことができた。 | 共通科目や実習と関係付け、院生の過重負担にならないようニーズに応じた発表を実施した。終末では、協働的な指導法開発に取り組み、発表･討議させることにより、実践的な力量形成を図った。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| シラバスでは、新学習指導要領、カリキュラムデザイン、アクティブラーニング、多様な評価方法論、小中一貫教育・コミュニティースクールについて学びを深め、系統的･横断的視点を生かした指導法の開発がデザインされていたが、院生の負担等を考慮し、他授業や文献、これまでの実践等を振り返り、院生のニーズに応じた課題を設定し、発表する場を設定した。また、初等・中等教育における協働態勢を推進する上で、相互乗り入れ授業を実施している長島町立獅子島小中学校での学びが有効であった。<br>※共同担当者のプチリフレクション･･･授業においては、重点領域実践実習Ｉと関連させ、校種を超えて協働的な指導法開発に取り組むことができ、実習において実践できた授業もあり、有意義であった。来年度以降の重点領域実践実習の事前指導の充実をいかに図るか検討していく必要がある。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 重点領域実践実習Ｉと関連付け、小中学校の相互乗り入れ授業を想定し、実習授業における学習指導案作成（協働）に取り組んだが、来年度以降院生の過重負担等を考慮しつつ、県教育センターの活用などを含め、早めに検討していきたい。 |
| シラバスレベル | 特になし。 |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　特になし。　） |
| 主なテキスト | 特になし。その都度、資料を配付した。 |
| 前年度からの改善点 | 校種を交えて協働的な指導法開発（学習指導案等の作成等）に取り組み、重点領域実践実習Ｉにおいて実践することができた。 |

| 講義名 | 特別活動の理論と実践（選択） | 2018 年度【Ｔ４】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 下古立　奥山　山元 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 特別活動の意義や特色を理解することができる。 | 調査結果から，望ましい集団活動のデザインを作成し，発表を行うことができたかを評価。 |
| 現 | 特別活動の事例や特別活動の意義や特色を，多角的に分析できる。 | |
| 新 | 特別活動の意義や特色を理解し，集団活動をデザインする力量を形成する。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 特別活動の理論（学習指導要領の確認，歴史的展開の整理，文献の読解等）を学修した後，特別活動についての調査をデザイン，実施した。その調査結果の分析から，望ましい集団活動を構想し，発表し合う（相互評価）とともに，そのアイディアをアイディア集としてまとめた。 | 受講者は，聴講生を含め現職教員学生３人，学部新卒生４人（１人はＭ２）の計７人であった。昨年度は，現職教員学生のみの受講であり，今年度は，現職とストマスの協働体制での演習を実施することができた。 | ・毎回の授業計画を協同担当者に事前に確認し，役割分担を行った。<br>・役割分担では，昨年度と異なり演習グループの担当を固定化し，継続的に指導できるようにした。<br>・デジタルポートフォリオに毎回特別活動について思うことを記入させた。 |

**主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...）**

本講義は，実務家教員３人で担当している。シラバスに沿って演習を中心に実践的に学修していく内容が中心の講義であるが，「特別活動の理論と実践」という講義名にあるように，理論部分をいかに受講生に保障するかが課題であった。そこで，昨年度に引き続き，実施あたって２つの手立てを講じた。１つ目は，研究者教員の協力を要請したことである。３・４時間目「研究者教員の知見に学ぶ」と題し，廣瀬先生をＧＴとして招き，講義を行ってもらった。２つ目は，「１頁読書」の実施である。特別活動のテキストとして使用できる文献を受講者が紹介したいページを１頁のみ写しをとり，次時で紹介するという取組である。昨年度は，受講生４人全員に各回紹介させていたが，時間を大きく取ることもあったので，今年度は，各回担当を２人（最終日は１人）ずつ決め実施した。これにより，紹介に対するコメントの時間も確保しながら，予定時間より時間がずれ込むこともなく実施できた。

また，「『特別活動とは...』シート」（各時間の講義を振り返り，特別活動についての自分の考えをまとめるシート）についても，昨年度に続き，毎回講義の終了後に記入させた。デジタルポートフォリオに記入させ，それを一覧表の様式にも転記させた。一覧にすることで，自分の特別活動についての考えの変容を振り返ることができるようにした。このシートには，１回目の講義前と 15 回目の講義後に，受講生なりの「特別活動」の定義を書かせる欄を設けている。この欄を概観すると，どの受講生も 15 回の講義を通して，「特別活動」についての捉え方や考え方などに，程度の差はあるものの変容が見られた。

※共同担当者のプチリフレクション･･･理論と実践を往還する取組を重視する働きかけによって，受講生が改めて「特別活動」と向き合い，「特別活動」とは何かを考える機会となったのではないかと思う。

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | 今年度，講義予定日が７回であったことなどから，アンケート実施２コマと分析等２コマの計４コマを一日で実施したが，余裕を持って取り組め全体的によかったように思う。来年度も，同様の計画を考えたい。 |

| | |
|---|---|
| シラバスレベル | 特になし |
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他 |
| 主なテキスト | ○片岡徳雄編（1990）「特別活動論」福村出版　○相原次男他（2010）「新しい時代の特別活動」ミネルヴァ書房　○山﨑英則，南本長穂編著（2017）「新しい特別活動の指導原理」ミネルヴァ書房　○林尚示編著（2016）「特別活動―理論と方法―」学文社　○原田恵理子他（2016）「最新特別活動論」大学教育出版　○中村豊・原清治（2018）「特別活動」ミネルヴァ書房 |
| 前年度からの改善点 | ・毎時の授業計画に目安の時間を記入するようにした。<br>・パソコンを持参させ，PLC 教室で授業を行った。<br>・PLC 教室で講義担当者も含め 10 人の机を円形に配置し，発言しやすい教室環境にした。<br>・「１頁読書」の担当を各回２人ずつとした。（最終回は１人） |

| 講義名 | 現代の教育課題に対応した指導法開発（選択） | 2018 年度【Ｔ３】開講 | |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 山元・下古立・奥山 | みなしの有無 | 無 |

| 目標（シラバス） | | 主な評価方法 |
|---|---|---|
| 共 | 現代の教育課題に対応する指導法開発の観点から構想される教育活動や授業デザインに関わる課題を把握するとともに、その課題克服に向けた具体的な授業計画を作成できる。また、作成した授業計画に関する協働的討議を踏まえて、改善案を作成することができる。 | ・各トピックの内容に関する所感等<br>・現代の教育課題に対応した指導法の発表内容と総括レポート |
| 現 | 現代の教育課題の解決に向け、学校における組織的かつ実効性のある取組を進める上での運営の担い手に求められる資質の向上を目指す。 | |
| 新 | 現代の教育課題の背景や要因、学校教育に求められる課題解決の在り方について理解を深める。 | |

| 講義の概要 | 学習者の様子 | 工夫点 |
|---|---|---|
| 多様な現代の教育課題の中から、受講者の校種等も踏まえ４つのトピック（県の学力の現状と課題、主体的・対話的で深い学びに向けて、生徒指導の現状と課題、学校安全と危機管理）について、具体的な事例等に触れながら、課題の把握と指導法や授業の在り方を追究するための情報提供を行った。さらに、自己のこれまでの実践から教育課題を１つ取り上げ、その課題克服に向けた具体的な教育活動、授業計画のデザインを試みた。 | ・受講者は５人であったため、討議は深まりにくかったが、各トピックの内容と個々の追究課題と重ねたり、教育課題の視野を広げたりしながら主体的に取り組めた<br>・現職教員のみであったため、次年度の探究課題を意識したプレゼンを作成していた。 | ・現職教員学生のみの受講であったため、来年度以降現任校に戻ることを踏まえ、現任校における教育課題にも目を向けさせた内容を実施した。<br>・県教育センター提携研究協力校（松陽高校、山下小学校）の研究公開にも参加し、互いの記録をもとに授業の在り方について検討した。高校の授業参観は非常に新鮮であった。 |

| 主担当者のプチ・リフレクション（講義を終えて...） |
|---|
| シラバスでは１５回の講義中半分以上がグループ毎の発表と討議の計画であったが、受講者数が５名とやや少人数であったため、授業の形態を変えることにした。授業の目標を踏まえて計画を変えるべきであったが、活動ありきで十分に目標を達成できていなかったのが大きな反省点である。特に４つのトピックに関する先行研究の整理、検討が不十分であったため、指導法や授業改善の具体的な方策まで協議することができなかった。また、各教育課題（トピック）へのアプローチに統一性がなく、最終発表のプレゼン内容との関連が薄かった。<br>※共同担当者のプチリフレクション･･･少人数であったものの、受講者の実態に応じた工夫をすることで、目標に迫る講義を実施することができた。 |

| 改善計画 | |
|---|---|
| 実践レベル | ・受講者の人数やキャリアによっては、教育課題のテーマを４領域から選択、もしくは４領域以外の課題を設定させて実施できないか検討したい。<br>・可能な限り受講生の人数やキャリアに影響なく毎年継続できる内容を検討したい。 |
| シラバスレベル | ・グループでのテーマ追究、討議が活動内容の中心となっているため、選択履修生の人数によって活動内容を変える必要がある。 |

| | |
|---|---|
| 教務レベル | ①開講期の変更の有無・・・無<br>②曜日や時間の変更の有無・・・無<br>③その他（　2020 年度開講するかは要検討　） |
| 主なテキスト | よくわかる授業論（ミネルヴァ書房）　その他必要に応じて資料配布 |
| 前年度からの改善点 | １ページ読書報告を毎時間取り入れ、昨年度不十分であった理論的内容の理解を深められるようにした。 |

## ６．教育相談Ｄａｙ

教育相談Ｄａｙとは、学生一人ひとりに対して面談の場を設定し、学習の状況や環境について話し合うことによって､学生の学びを深めるとともに､教職大学院の教育改善に役立てる取組である。学生一人につき 30 分間程度、教員２名で行う形式を基本とし、本年度は、次の日程で実施した。

＜実施日＞
第１回：6 月 6 日
第２回：12 月 4 日・6～7 日

面談記録をもとに、話題にのぼった事柄を分類した上で集計したものが、下表である。各学生の学習上の関心内容や困りごと等について語り合うだけでなく、要望事項や学びの手応え等についても聴き取っている。

| 話題の分類項目 | | 6 月 | 12 月 | 内容（一部） |
|---|---|---|---|---|
| 学習面 | 探究課題について | 6 | 16 | 関心内容、進捗状況、テーマの絞り込み方、文献の読み方、勤務校の課題とニーズ |
| | 授業について | 4 | 4 | 関心内容、レポート課題の状況、討議のあり方、履修計画の立て方 |
| | 実習について | 6 | 7 | 関心・期待を寄せている内容、各実習の展開イメージ、実習校の決め方 |
| | 学習環境について | 13 | 5 | ICT 関係の機器・ソフトの使用感、要望事項（行事予定の早期周知・２年生との交流機会・院生室や談話室の充実・オフィスアワーの拡充等） |
| | 院生間の協働について | 2 | 1 | 学卒院生の視点に現職教員院生が新鮮な刺激、自主研究会 |
| | 全般的な手応えについて | 7 | 4 | 目から鱗のことばかり、学びが繋がるおもしろさ、校種の文化を超えて議論ができる |
| 学習面以外 | 心身について | 3 | 0 | 持病 |
| | 生活状況について | 3 | 2 | 家庭状況、アルバイト状況 |
| | 進路・今後について | 4 | 1 | 志望先、修了後のキャリア |